

投資家から見た上場の価値

- ・上場企業が減っている。世界的な金融危機が実態経済に多大な影響を及ぼし、存続が危ぶまれ、再編を余儀なくされる企業が続出している。MBO（マネジメントバイアウト）により市場から出ていく企業もある。上場しているメリットよりも、そのリスクが重荷になるという理由である。やたらコストや手間がかかり、思い切った手が打てない、といった意見もある。
- ・果たして上場していることは、それほど価値のないことなのだろうか。今、上場の意義や価値を高めるために考えるべきことは、企業と投資家の間にある“情報の非対称性”が引き起こす問題への対応である。
- ・情報格差が上場の価値を引き下げている可能性がある。上場会社は本当に付加価値を生んでいるのか、が問われる。例えば、事業が社会的に必要なものとして認識され、会社は株主が要求する資本コストを上回るリターンを上げるべく努力をしているか。株式市場を甘く見ているのではないか、万全の努力がなされていない企業や、責任を果たしていない経営者が存在するのではないかと市場は懐疑的に見ている。
- ・一方で上場企業は多大な努力しているが、市場の仕組みがそれに応えていないのではないかと、という課題もある。実際、投資家と企業をつなぐ情報機能は必ずしも十分ではない。会社が伝えたい情報と、投資家が知りたい情報には絶えずギャップがある。例として、会社側は過去の実績や中期的な計画を伝えようとするが、投資家は将来の業績を示す材料や進捗状況を知りたいと考える。
- ・こうしたギャップを埋めるべく会社を分析し、情報を発信することがアナリストの使命である。大いに奮闘してもらいたいし、自らも奮闘したいと考えている。